

尻（シリ）と掏摸（スリ）

『コルナイ・ヤーノシュ自伝』 翻訳余話

盛田 常夫

経済学者と伝記

ハンガリーの経済学者『コルナイ・ヤーノシュ自伝』(Kornai János, *A gondolat erejével, Osiris, 2005*)を翻訳した。経済学者の伝記など面白くもないと考える人も多いだろう。2002年のアカデミー賞を受賞した「ビューティフル・マインド」は、ノイマンが開発したゲーム理論への理論的貢献でノーベル経済学賞を受賞した数理経済学者ナッシュを描いたものだ。大学院時代に執筆された論文がノーベル賞受賞対象になったのだが、ナッシュは数学者としての名声を獲得する前に精神分裂病を発症し、長い闘病生活を送っていた。ノイマン（モルゲンシュテルンとの共著）の「ゲーム理論」出版50周年になる1994年に、ノーベル経済学賞選考委員会は戦後のゲーム理論の発展に貢献した学者を受賞対象にすることを決め、委員会は病状の安定を確認した上で、ナッシュをその1人に選んだ。この劇的な展開がノンフィクション（シルヴィア・ナサー『ビューティフル・マインド』2002年、新潮社）で描かれ、映画化された。

アカデミー賞を受賞するような映画になることもあるのだから、経済学者の伝記も捨てたものではない。もっとも、ナッシュの実像はスキャンダラスな部分が多く、題名のようにビューティフルではないどころか、アグリーなのだ。サスペンス調に映画化された銀幕のナッシュは虚像。現実からはかなり遠い。ビューティフルなのはナッシュのような奇人を介護したり、大学の籍を守ったりしてナッシュを支援してきた人々である。映画のほとんどがフィクションである。

それに比べると、『コルナイ・ヤーノシュ自伝』のテーマはもっと歴史的に重い。1940年代から社会主義の崩壊までハンガリーの中に生きてきた知識人の記録だ。ユダヤ人として生まれたコルナイ家の生活が、ナチスドイツのハンガリー進駐によって、根底から崩れる様子が詳しく描かれている。逃亡生活を終えた少年コルナイが、戦後の社会主義政府の樹立に伴って、ハンガリーの解放勢力である共産党の機関紙記者になるのは自然なことであった。しかし、共産党の専制政治とハンガリー動乱を契機に、再び彼の人生が変わっていく。何度も亡命するチャンスはあったが、ハンガリーに残る決断は揺るがなかった。現代を生き抜いてきた知識人の生き様は、ハンガリー社会の具体的なイメージを膨らませてくれる。

社会主義経済の現実を分析する者にとって、亡命はその現実的な土台の喪失となる。これがコルナイの本能的な直感だった。大著『反均衡の理論』（1971年）と『不足の経済学』（1980年）で国際的に評価されたコルナイは、最終的に、1986年にハーヴァード大学の招聘を受け入れる。しかし、これは亡命ではなかった。大学の度重なる定住要請にもかかわらず

らず、ハンガリーとの半年ごとの交互勤務という特例を条件にしたものだった。

こうしてコルナイは社会主義経済研究の第一人者という名声を得て、彼の著作は1980年代のこの分野の研究において最大の知的関心を引き起こした。専門研究論文における引用頻度で言えば、マルクスやレーニンを凌いで、コルナイがこの時代のスターだった。ロシアや東欧、中国における体制の思想的な革新へ大きな影響を与えた経済学者である。

翻訳の質を決めるもの

翻訳の良否を決める要因にはいくつかある。一つは、翻訳語の能力である。ハンガリー語から日本語への翻訳について言えば、日本語能力が決定的な重要性をもつ。もちろん、逆は逆である。ここが通訳と違う点で、話し言葉にはかなりの曖昧さが許されるのにたいし、書き言葉には曖昧さや不明瞭さは許されない。言語の習得において一番難しいのは書き言葉である。日本人であっても、味のある日本語文章を書くのはたいへん難しい。だから、どんなに通訳能力のある外国人でも、母語でない外国語への翻訳は不可能である。これまでの経験から言えば、日本語への翻訳の質を決める要因の少なくとも半分は、日本語の文章力で決まる。

第二の要因は、翻訳内容の専門知識である。2001年出版の邦訳書『異星人伝説』の翻訳では専門分野が違うから苦労した。物理学、化学、数学の専門内容や用語の正確な翻訳のために、それぞれの分野の教科書を読んだり、物理数学辞典を調べたりすることに時間がとられた。自然科学分野の研究者が翻訳すれば、もっと楽に訳せただろう。しかし、多くの自然科学研究者は長い文章を書く必要性や習慣がないから文章がうまくない。文章がうまくないと、読める文章が綴れない。

それはともかく、翻訳作業において専門分野の知識は3～4割の位置を占めるだろう。理論的な内容は思案するまでもなく、簡単に理解できる。今回の『コルナイ・ヤーノシュ自伝』は、これまで出版された自らの著作の批判的な省察に内容の三分の一ほど当てているから、コルナイ理論を知っているのと知らないのでは翻訳の正確さもスピードも違ってくる。

第三の要因は原語の語学力である。今回のケースで言えば、ハンガリー語の能力である。文学書の翻訳の場合には原語能力のウエイトは5割以上を占めるだろうが、専門書の翻訳の場合には高々1～2割程度だろう。専門知識で理解できる部分が大きいから、原語能力のウエイトはそれほど高くないのだ。

外国語表記の問題

著名な経済学者の多くはアメリカで活躍している。とすると、ドイツ人やフランス人の経済学者の人名を、母語の発声で表記するのか、それとも英語の発声で表記するのかという問題が出てくる。経済学の世界では英語読みにするのが一般的だが、たとえば物理学者のアルベルト・アインシュタインはアメリカ滞在が長いから、英語読みでアルバート・ア

インシュテーンとなるところだが、敬意を表してドイツ語読みで呼ばれていた。だから、何人かの経済学者について、実際にどう呼称されているのかを確認したり、インターネットで多数派の表記を確認したりしなければならない。これは結構面倒な仕事だ。

これとは別の日本語表記の問題がある。『異星人伝説』の翻訳に際しては、物理学者の **Szilárd Leo** を「スイラード」と表記することに拘った。日本ではふつう「シラード」として表記されている。この原則を採用すると、多くの日本語人名表記で「シ」と「ス」を明確に区別することが必要になる。たとえば、ハンガリー国会議長の **Szili Katalin** を「尻カタリン」と表記しては失礼で、「スイリ・カタリン」と表記・発声すべきである。同じことは、**Szilveszter** も「尻ベスター」ではなく、「スィルヴェスター」である。ナッシュの伝記の著者 (**Sylvia Nasar**) も、シルヴィアではなく、スィルヴィアと表記すべきだろう。

RとLのように、日本語発声で区別されない音は区別して書きようがない。しかし、「ス」と「シ」は日本語でも明瞭に区別される音である。にもかかわらず、外国語の日本語表記において、これを区別することなく、「ス」を「シ」と表記することが一般的になっている。これは明らかに発声に無頓着だった昔の「なまくら」表記をそのまま踏襲しているからに他ならない。もっとも、方言によっては「ス」が「シ」になまったり、その逆が見られたりして、日本語では「シ」と「ス」が曖昧に相互移行する音になっている。しかし、「掏摸(スリ)」と「尻(シリ)」の意味が違うように、「ス」と「シ」の発声を間違えると、外国語では意味が通じなくなる。

たとえば、**I see see** を「アイ・シー・シー」と発声すれば、**I she she** としか聞こえないから、意味は通じない。だから、「アイ・スィー・スィー」と表記した方が良い。**Silicon** は「スイリコン」であって、「尻コン」ではない。**Simulation** もふつうの日本語表記では「シミュレーション」(**šimjuléiʃən**) と書かれるが、原音は[ʃi]ではなく[si]だから「スイミュレーション」と発音しないと、すぐには理解されないだろう。テレビなどは和製英語化したものだと見なされるが、微妙なものもある。**Dilemma** はどう発音しても「痔レンマ」とはならないが、「ジレンマ」はもう定着している。だが、「ディレンマ」と発声しないと、まず理解されない。また、**discipline** も「弟子プリン」と表記する場が多いが、これも「ディス(イ)プリン」と発声しないと理解されないだろう。

濁音の場合も同じだが、日本語では「ズ」(頭)と「ジ」(痔)の発声はさらに曖昧になり、ほとんど区別されないから問題は深刻だが、幸いにして、清音に比べて事例が少ない。これもふつうの日本語表記では、「ジ」に統一される。しかし、印欧語の発声では明確に区別される音だから、「ス」と「シ」と同じように区別して表記するのが望ましい。そうしないと、外国では通じない。たとえば、ドイツの神学者の **Süßmilch** を「ジュース(ミルヒ)」と表記すれば **juice-[dʒu:s-]** になるが、原音は **zys[zy:s-]** だから「ズース(ミルヒ)」と表記するのが正確である。

蒸留酒の **gin** は「ジン(dʒin)」が良いが、ドイツ語の **Zinn** は「ツィン(tsín)」であって、けっして「痔ン」ではない。工学者の **Zworikin** は「ツヴォリキン」であって、「痔ポリキ

ン」ではない。ちなみに、サッカー日本代表監督 Zico は「痔ーコ」でなく、「頭イーコ」あるいは「頭イッコ」だろう。ちなみに、グーグル検索で見ると、正しい表記（ズィーコ）をとっているサイトが 323 件なのにたいして、誤った表記（ジーコ）はその千倍もある。ちなみに、次期監督も「イヴィツァ・オスィム」で、「揖斐茶・惜しむ」ではない。外人から自分の名前を変に発音されたら気分が悪い。そのことを考えれば、もっと発音や表記に気を配るべきだ。蛇足だが、以前に NHK のモスクワ特派員が「エリチン」大統領を連発していた。「イェルツィン」と発声しないと言語教養が疑われるだろう。朝日新聞でも、わざわざユシェンコを原語発声に近い長音発声のユーシェンコを採用したと断っておきながら、ティモシェンコをチモシェンコなどと平気で表記しているから、日本人の聴力が疑われても仕方がないだろう。

対象とする読者

『異星人伝説』は一般読者向けに準備されたハンガリーの現代科学史を外観できる書物だったが、今回の『コルナイ・ヤーノシュ自伝』の対象読者は社会科学の専門家である。ハンガリー現代史、東欧史、社会主義史、社会主義経済、現代経済学、社会科学の創造論、科学史等を専攻している、あるいはこれから専攻しようとする研究者や知識人を読者として想定している。とくに、現代経済学を専攻する者は社会科学における理論創造の営みを直に知ることができよう。その意味で、これは経済学を事例にした、科学創造論でもある。

1991 年と 1992 年には日本の新聞社の依頼で、コルナイがノーベル賞を受賞した場合のコメントを用意していた。多くの人々が体制転換を促した理論的著作が受賞の有力な候補なりうると考えていた。残念ながら、これは実現しなかった。今でもコルナイがノーベル経済学賞をとる確率は低くないが、最近の選考動向をみると見通しはそれほど明るくない。だが、ハンガリーの現存学者の中で、ノーベル賞に一番近い存在であることも事実である。

蛇 足

本筋から離れるが、日本の学術出版の状況について、少しだけ記しておきたい。

現代の日本では学術出版がビジネスとして成立しなくなっている。我々の学生時代までは、学生は本を買って勉強するというのが常識だった。ここ 30 年の間に有象無象の出版社・出版物が氾濫し、かつ PC ゲームが普及する段になって、学生は本を読まなくなったし、買わなくなった。売れている書籍は皆、ポイ捨てされるような質のものか、映画で話題になったものである。まず硬派な書籍は売れない。というより、読む学生がいなくなった。岩波書店の年間売上額が、駿台予備校の参考書の売上額に及ばないという嘆きを聞いた。日本の知的水準の維持（向上は難しい）にとって、この状況は危機的である。

今回の出版も最初から、赤字前提の仕事である。世の中、景気の良い話が飛び交っているが、日本の学術出版は危機的な状況にある。それは日本社会全体の知的水準の荒廃を反映するものでもある。